

古書便り

―尾道大学附属図書館収蔵『経盛家詞合』について

藤 川 功 和

はじめに

尾道大学に奉職して有り難いことの一つは、大学の予算で必要な本を比較的自由に購入出来ることです。大学の予算、つまりは尾道市の予算ということですので、出来るだけ有意義に、そして購入した本は私が手にとつて楽しむだけではなく、学生さんを中心になるべくたくさんの方の目に触れられるようにしたいと考えています。

そんな中、平成二十二年三月に、購入希望を出していた本の内、古書三点の購入が認められ、尾道大学附属図書館に収蔵されました。これら三点は出版社から刊行されている通常の図書と違い、古書店を通じて購入する写本（人の手によつて書写された古書）や版本（版木を彫つて、それで印刷した書物）

でして、明治時代以前のもが多く、貴重でもありますし、ただでさえ古い書物がこれ以上傷まないようにする為にも、管理は通常の図書と同じという訳にはゆきません。したがつて、平生は図書館の貴重書庫に納められていて、図書館利用者の目に触れる機会是一般の図書に比べると格段に少ないというのが実情です。

せっかく収蔵された書物をなんとかお披露目する機会はないものかと考えていたところ、折良く本年度から新たに尾道文学談話会の会報が創刊される運びとなり、私も投稿をお許しいただきました。そこで本稿では、収蔵された三点の内、まず『経盛家詞合』（以下、本学図書館収蔵の写本の場合は『経盛家詞合』の表記を用い、その他の場合は『平経盛朝臣家歌合』と表記して区別します）についてご紹介いたします。

一 『平経盛朝臣家歌合』について

作品名にみえる経盛（一一二四～一一八五）は、平忠盛（二〇九六～一一五三）の息で、清盛（一一一八～一一八二）の異母弟にあたり、平家一門の武将として活躍し、最後は壇ノ浦でその生涯を終えます。彼は和歌もよくし、当代の主要歌人との交流があり、種々の歌会や歌合に参加し、時には主催もしています。経盛の歌才は父忠盛から受け継いだらしく、忠盛は存命中に撰集された我が国第五番目の勅撰集『金葉和歌集』に以下の四首がとられ勅撰歌人となっています。

（資料一）『金葉和歌集』二度本入集、忠盛歌

月のあかゝりける頃、明石にまかりて月を
見てのぼりたちけるに、都の人ゝ月はい
かゝなどたづねけるを聞きてよめる

平忠盛朝臣

ありあけの月も明石の浦風に波ばかりこそよる
と見えしか
（秋部・二二六）

野草留^ム人^ヲといふことをよめる

平忠盛朝臣

ゆく人をまねくか野辺の花薄こよひもこゝに旅
寝せよとや
（秋部・二三八）

殿上申けるころせざりければよめる

平忠盛朝臣

思ひきや雲の月をよそに見て心の闇にまどふ
べしとは
（雑部上・五七一）

親しき人に後れて業の事はてて帰りけるに
よめる
平忠盛朝臣

いまぞしる思ひのはては世の中のおき雲にのみ
まじる物とは
（雑部下・六二二）

（本文は「新日本古典文学大系」
例えば、二一六番歌は、忠盛が実際に明石の地を
訪れた際に詠んだもので、地名の「明石」に月が「明
し」（明るい）の意が掛けられています。古来より
月の名所として知られる明石では、有明の月が明る
く波だけが夜（波の縁語「寄る」との掛詞）のよう
であると詞遊び的に詠まれています。

このように和歌をよくした忠盛を父に持つ経盛も
また、存命中は叶いませでした、後年藤原定家

(二一六二〜二二四一) が撰進した『新勅撰和歌集』に、『平経盛朝臣家歌合』から次の一首が入集しています。

(資料2) 『新勅撰和歌集』秋歌下・三〇五

歌合し侍りけるに、しかをよみ侍りける

前参議経盛

峰になくしかのねちかくきこゆなりもみぢふき
おろす夜はのあらしに

(本文は「新編国歌大観」)

ここで、当時和歌をたしなむ者にとつて勅撰集に自身の歌がとられることが、いかに大事であつたのかを窺い知る著名な逸話を少し長いですが、以下に引用してみます。

(資料3) 『平家物語』忠度都落

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に七騎取つて返し、五条の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、その内さわぎあへり。薩摩守馬よりおり、身づからたからかに宣ひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべき事あつて、忠度がかへり参つて候。門をひらかれ

ずとも、此きはまで立寄らせ給へ」と宣へば、俊成卿、「さる事あるらん。其人ならば苦しかるまじ。いれ申せ」とて、門をあけて対面あり。事の体何となう哀れなり。薩摩守宣ひけるは、「年来申し承つて後、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この二三年は京都のさわぎ、国々の乱、併しながら当家の身の上の事に候間、疎略を存ぜずといへども、常に参り寄る事も候はず。君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はやつき候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に一首なりとも、御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱いでき^①て、其沙汰なく候条、ただ一身の歎と存ずる候。世しづまり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずら^②む。是に候巻物のうちにさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ」とて、日比読みおかれたる歌共のなかに、秀歌とおぼしきを百余首、書きあつめられたる巻物を、今はとてうツたれたれる時、是をとつてもたれたりしが、鎧のひきあはせより取りいでて、俊成卿に奉る。三位是をあけてみて、「か^③

かる忘れがたみを給はりおき候ひぬる上は、ゆめく疎略を存ずまじう候。御疑あるべからず。

さても唯今の御わたりこそ、情もすぐれてふかう、哀れもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」と宣へば、薩摩^③守悦^③で、「今は西

海の浪の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ、浮世に思ひおく事候はず。さらば暇申して」とて、馬にうち乗り、甲の緒をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。三位うしろを遙かかに見おくッてたれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す」と、たからかに口ずさみ給へば、俊成卿いどど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。

其後世しづまッて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきしことの葉、今更思ひ出でて哀れなりければ、彼巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷花」といふ題にて、よまれたりける歌一首ぞ、「読人知らず」と入れられける。

さざなみや志賀の都はあれにしをむかしな
がらの山ざくらかな

其身朝敵となりにし上は、子細におよばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

(本文は「新編日本古典文学全集」)

このエピソードの主人公忠度(一一四四～一一八四)は、経盛の同母弟です。このくだりは、忠度が都落ちする前に、藤原定家の父で当代一の歌人であった俊成(一一一四～一二〇四)のもとを訪ね、傍線①——この後源平の争乱が治まり勅撰集撰集のあかつきには、自分の和歌が一首だけでもとられたなら望外の喜びであると、自詠を集めた巻物を俊成に託します。俊成は、傍線②——「ゆめく疎略を存ずまじう候」とたしかに約束し、それを聞いた忠度は、傍線③——「今は西海の浪の底に沈まば沈め……」もはや思い残すことはない、そのまま都を離れます。その後、傍線④——俊成は忠度との約束を果たし、「勅勘」(天皇からの咎めの意。戦に敗れた平家一門は罪人扱いでした)を蒙った忠度の歌「さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな」(春歌上・六六・「故郷花といへる心をよみ侍りける」)を「読人しらず」として、自らが撰進した第七番目の勅撰集『千載和歌集』に入集させます。

こんな風に勅撰集に一首だけでも自作をとられる

ことは大変名誉なことでした。ちなみに、時代が下つて室町時代になると、勅勘の身として名前を表されなかった忠度が幽霊となつて現れる話(謡曲『忠度』も見られますが、それはまた別の機会に触れます。

そんな忠度や経盛ら平家一門が全盛だった仁安二年(一一六七、清盛はこの年太政大臣になります)に、経盛が自邸で催したのが『平経盛朝臣家歌合』です。岩波書店から刊行された「日本古典文学大系」というシリーズの一冊『歌合集』(昭和40年)に収録されていますので、手軽に活字本で読むことができます。

歌合とは、出席者が左方と右方の二グループに別れて、左右から一首ずつ歌を出し、組み合わせ(番《つがい》)ます。そして、一番ごとに左右どちらの和歌が優れているかを判者(はんじゃ)が判定し、勝負、持(じ、引き分け)を付けてゆき、左右方で勝数を競います。もともとは一種の遊戯として催されていたのですが、和歌が盛行を迎えるようになると、次第に和歌の文芸的優劣を競う真剣勝負の様相が色濃くなつてゆきます。

本歌合では、主催者経盛他、藤原清輔(一一〇四〜一一七七)、弟の重家(一一二八〜一一八二)といっ

た当代を代表する歌人が参加しています。では、本学図書館収蔵の『経盛家歌合』をテキストにして最初の一冊を読んでみましょう(傍線や読点などは私に付けました)。

(資料4) 尾道大学附属図書館蔵『経盛家歌合』

「草花」題一番

一番 草花

左 持^② 刑部卿藤原重家朝臣

色とこそ萩か花摺思ひしか

香さへ袂にうつりぬるかな

右 前少納言藤原資隆

秋の野にいつれともなき花なれと

まねく薄そ先めにはたつ

左右哥見たまふるに、をのく^③

思ふところなきにあらず、はた左哥^④

の枕の句、右哥のむすひ句ともに

心ゆかす侍れば、みしかきおもひは

かり、ひたりみきにまとひて、なま

しひに持に定早

傍線①が歌題となります。歌人は「草花」を自身の和歌に過不足なく詠み込まなくてはなりません。傍線②がこの番についての判者の勝負判定で、「持」

すなわち引き分けとなっています。左歌が重家の「色とこそ萩か花摺思ひしか香さへ袂にうつりぬるかな」（萩の花で衣を摺り染めるのは色を摺り移すことと思っていたのに、《色だけではなく》香までが袂に移ったよ）、右歌が藤原資隆の「秋の野にいつれともなき花なれとまねく薄そ先めにはたつ」（秋の野では特にどれがすぐれたとも言い難く、みな愛すべき花だが、風にそよいでまるで手招きしているかのようにみえる薄が先ず目に付く）です。右歌の直後に一字下げで六行にわたって記されているのが、判詞といって判者が勝負を決するに至った判決文のようなものです。

その判詞では、傍線③—左右の歌を見ますとそれぞれ作者の歌作上の狙いがないではない、傍線④—しかしながら左歌は初句の「色とこそ」が、右歌では結句「先めにはたつ」という表現が納得できないです、傍線⑤—「みしかきおもひ」（短慮、浅はかな考えの意で判者が自身の考えを卑下した言い回し）では左右どちらを勝とすべきか分からなくなってしまうって無理矢理引き分けにした、と持と判定した経緯を述べています。

判者の藤原清輔は当時六十四歳。父頭輔（一〇九〇

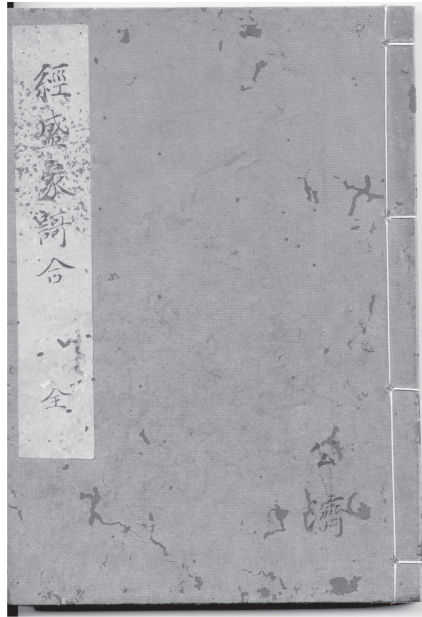
（一一五五）は第六番目の勅撰集『詞花和歌集』の撰者となり、頭輔以降、和歌の家として広く認知されていました。判詞をみると、両歌をそれとなく評価しながらも、それぞれや難のある箇所を指摘し、自身の判定結果に誘導しています。（時と場合にも異なりますが）詠者のプライドをあまり傷つけずに、なおかつ評価すべき点や難点を指摘しつつ、自身の判定を述べています。判者にはそれ相応の知識や経験が求められることがお分かりいただけるでしょう。また、判詞には判者がどういった和歌を評価し、どういった和歌を評価しなかったのか、すなわちその判者の和歌観が自然と現れますので、そういった点でも歌合は貴重な資料といえます。

二 尾道大学附属図書館蔵『經盛家詞合』の概要

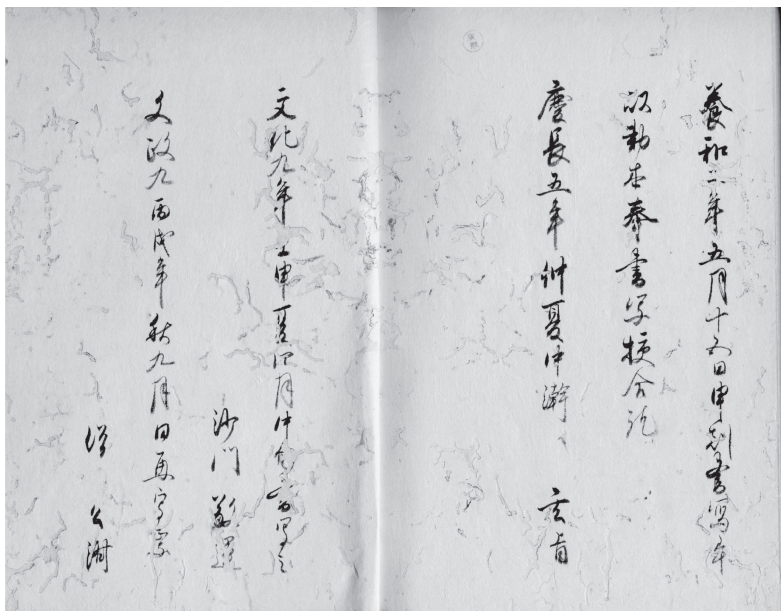
では、本学収蔵の『經盛家詞合』について確認しておきましょう。全一冊の写本です。【図版①】のように表紙には題簽（ラベルのようなもの）が貼られていて「經盛家詞合 全」とみえます。また、表紙右下端には「公濟」と人名らしき記載がみえます。

本の大きさは、縦23・2 cm×横16・2 cm。二つ折りにした和紙を五十七枚重ねて表紙を付けて糸で綴じてあります。綴じ方は、近世の和装本の多くが用いている四つ目綴（よつめとじ）です。

【図版①】 尾道大学附属図書館蔵『經盛家詞合』表紙



【図版②】 尾道大学附属図書館蔵『經盛家詞合』奥書



また、この写本の末尾には【図版②】のように奥書（おくがき）が記されています。奥書とは、その写本の由緒を記したもので、その写本がいつ誰によって書写されたのか等を知る上での手掛かりとなります。以下にこの写本の奥書を翻刻（活字化）したものをあげます。

養和二年五月十五日申刻書写早

以勅本奉書写校合訖

慶長五年仲夏中澣

玄旨

文化九年壬申夏四月中旬書写之

沙門敬暹

文政九西戌年秋九月日再写焉

僧 公濟

『平安朝歌合大成増補新訂』第四卷（萩谷朴氏 平成8年）に拠りますと、『平経盛朝臣家歌合』の写本は、群書類従本、内閣文庫本、宮内庁書陵部蔵桂宮本等比較的多くみられるようですが、それら「諸本は全て同一宗本から出た一系統の証本」と結論づけられています。つまり、現在残っている『平経盛朝臣家歌合』の写本同士を比較しても本文にあまり

違いがみられないということであり、例えば同じ『源氏物語』であつても青表紙本系統と河内本系統とは、本文にかなりの違いが見られるというのとは異なっています。

引き続き本学収蔵の『経盛家詞合』の奥書をみますと、傍線部「養和二年」に続いて二重傍線「以勅本」玄旨」という情報がみえます。傍線部はこの歌合の成立から十五年後の養和二年（一一八二）に誰かの手によってこの歌合が書写されたことを示している（これを通常「本奥書」《ほんおくがき》と呼称しています）、二重傍線部は「勅本」（おそらく天皇家にあつた養和二年書写の奥書を持つ本）を用いて慶長五年（一六〇〇）に転写（新しく写し直した）したことを示しています。ちなみに二重傍線部末尾の玄旨は、武将にして歌人でもあつた細川幽斎（一五三四～一六〇〇）のことです。この二つの書写に関する記載が本書のように続けて記載されている奥書を持つ写本は、萩谷氏の調査によりまずと、他に彰考館本・神宮文庫本があるそうです。

本書にはさらに、文化九年（一一八二）と文政九年（一八二六）にそれぞれ敬暹と先程表紙にも記載のあつた公濟によって転写されたことが分かります

(いずれも僧侶であるこの二人の素性も気になるところですが、この件は別の機会に考えてみます)。

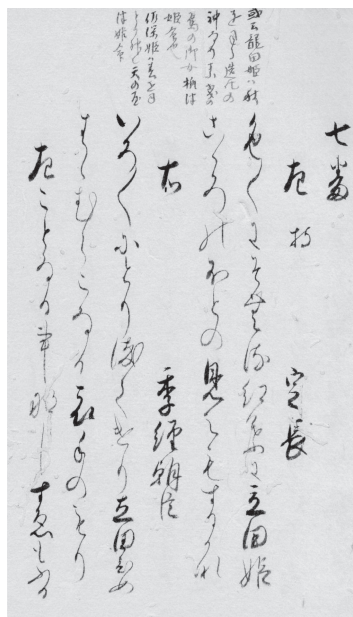
以上、奥書を読む限り、本学図書館収蔵の『經盛家調合』は、養和二年から文政九年の間に数度の書写を経て、今に至っていることが窺えます。

三 尾道大学附属図書館蔵『經盛家調合』の書き入れ

『經盛家調合』の詳細な調査は今後行いますが、本文的には今まで世に知られている多くの写本とそれほど違いはないようです。しかしながら、一方で次のような事象が確認されます。

【図版③】 尾道大学附属図書館蔵『經盛家調合』

「紅葉」七番（一部）



（資料5） 尾道大学附属図書館蔵『經盛家調合』

「紅葉」七番翻刻

七番

左 持 定長

或云龍田姫ハ秋
を司る造化の
神なり素戔の
鳥の御女瓊津
姫命也
佐保姫ハ春を司
とる神也天の屋
津姫命

右 季経朝臣

いろくにとり染てけり立田ひめ
はしむらこなる衣手のもり

左、ことなる事なし、すゑもふる

めきてや、又誹諧哥ていに侍る
めれはいつれとも申かたし

「紅葉」題七番の全文をあげました。「紅葉」題に相応しく、両歌とも秋を司る女神といわれる「竜田姫」（ちなみに春を司る女神は佐保姫）を詠み込んでいます。和歌の世界における伝統的な発想として「見るごとにあきにもあるか立田姫もみぢそむとや山はきるらん」（『古今和歌六帖』第一・六四八・凡河内躬恒、『後撰和歌集』秋下・三七八・「題しらず」・よみ人しらず）のように、立田姫が紅葉を染めるという詠み方が、この七番の左右の歌でもなされているのです。

判詞では、左歌は「ことなる事なし」（取り立てて言うこともなく）、「すゑもふるめきてや」（末句も言い古された詠み方だろうか）、また右歌は「誹諧哥てい」なのが難で、両歌とも決め手に欠くので引き分けにするとみえます。「誹諧哥てい」は戯れ言めいた詠み方の意で、大系本は「はしむら」に着目して、「櫛（じ）に何となく恥（は）の音が通ったりするの、一寸ざれ言めいて聞こえたか」と指摘しています。

また、大系本の解釈とは別に、「はじ」がハゼノ

キの別称で、「はじ」「はぜ」が共に紅葉することから、「春ははな秋はもみぢとさそはれて人もたちよるころもでのもり」（『馬内侍集』一四一・「もりといふ所をゑにかきてよみしかば」）のように紅葉がよく詠まれた歌枕「衣手のもり（杜）」が、「ぬるで」（白膠木、ウルシ科の落葉小高木）↓「ころもで」という紅葉繋がりの戯れ言から導き出された可能性も考えられます。

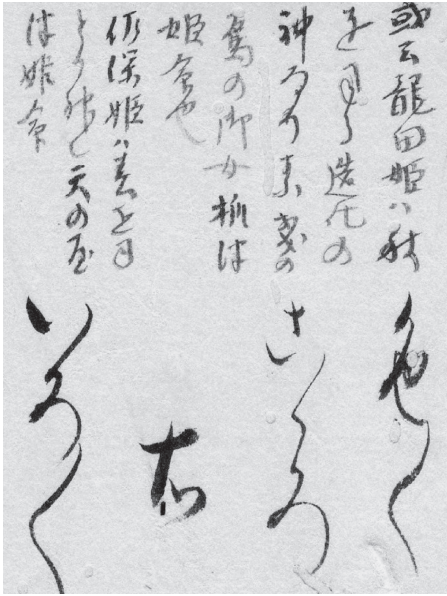
さて、注目したいのは、次頁【図版④】の拡大写真に確認されるような、和歌本文の余白に記された注記です。ここの注記は、「或云、竜田姫ハ秋を司る造化の神なり、素戔の鳥の御女栞津姫命也、佐保姫ハ春を司とる神也、天の屋津姫命」と読めます。注記には「或云」として、竜田姫が秋を司る創造神で、素戔鳴（スサノオ）の尊の女（むすめ）栞津姫命（つまつひめのみこと）のことであるという情報を書き留められています。また、佐保姫は春を司る神で、天の屋津姫のことであるという情報も同時にみえます。こういった注記はこの歌合の成立当初から存在したものではなく、書写される過程で、書写者或いは写本の所蔵者が、他の書物等から得た知見を解釈の参考にするべく書き加えたものと考えられ

ます。なお、大系本が活字化する際にテキストとした内閣文庫本（整理番号、和書二五七六五号、室町末期／近世初期の写本）にも、ところどころに注記がみえるようですが、本学図書館所蔵本の注記とは異なっています。

本学所蔵の『經盛家謗合』にはこういった注記が他にも数カ所みえ、今後それらの注記についても読み解き、また他の写本に同様のものがみられるのかという点についても調査してみたいと思います。

【図版④】尾道大学附属図書館蔵『經盛家謗合』

「紅葉」七番注記



おわりに

尾道大学附属図書館所蔵本『經盛家謗合』について、現段階での大まかなまとめを述べますと以下のようになります。

一、本学所蔵『經盛家謗合』は文政九年九月の奥書を持つ写本。

二、本文的には今まで確認されている写本とそれほど大きな違いはない。

三、数カ所、本文に関する注記がみえる。

三については、先に述べましたように、他の写本に同じ注記があるのかを一つ一つ確認する必要があるが、この歌合本文が現在までのように読み継がれていたのかを探る一つの材料といえるでしょう。

最後に本学所蔵『經盛家謗合』の特色をもう一つご紹介します。【図版⑤】は【図版②】を拡大したものです。無数の染みのようなものは、虫が紙を食べた跡なのですが（所謂「虫食い」）、実は本書では虫食いの箇所について、その全てを一つ一つ丹念に補修している事が確認できます（これは、本学日本文学科三年生 濱田雄介君の発見です）。虫食いの補

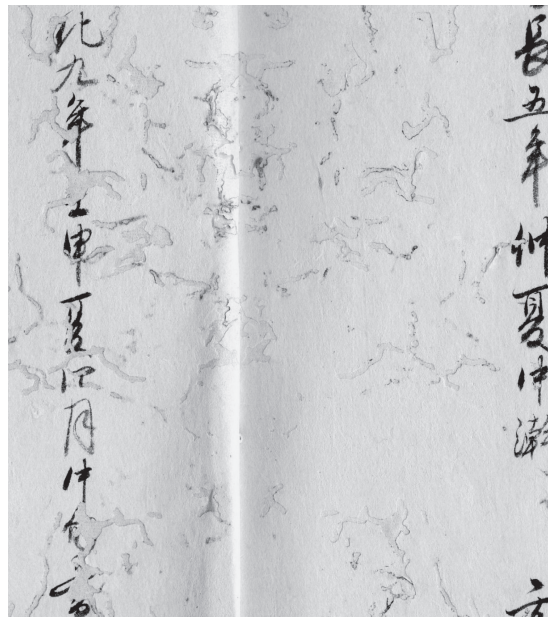
修は、虫食いの箇所ごとに空いた穴と同じ大きさの紙を貼って穴を埋めてゆきますので、かなりの手間が掛かります（少なくとも私にはムリです）。

したがって、この写本が文政九年九月に成立してから平成二十二年に尾道大学附属図書館に収められるまでの歴代の所蔵者の誰かが補修を行ったものと考えられます。言い換えれば歴代の所蔵者の中にこの写本（或いは本全般）をとりわけ大切にしている人がいたことを物語っているともいえるでしょう。

写本の余白に書き付けられた注記が、その作品の享受の一端を示すものであるのならば、虫食いの跡を丹念に補修している痕跡もまた、学術的な意義とは別にその写本の享受の一端を指し示すものといえるでしょう。

今となつては実際に会うことは叶わないその写本の昔の持ち主の作品に対する理解や本に対する思い入れを垣間見ることが出来る——写本をじかに手にすることで得られる喜びの一つは、そんなところにあるような気がします。

【図版⑤】 虫損の補修跡



—ふじかわ・よしかず

尾道大学日本文学科准教授—